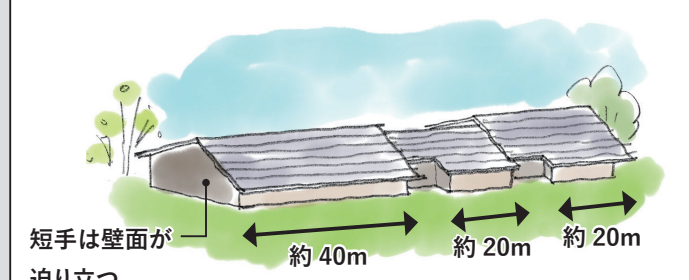
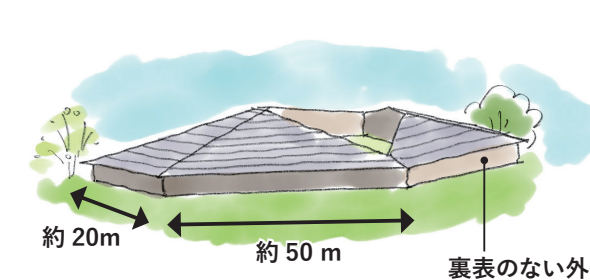
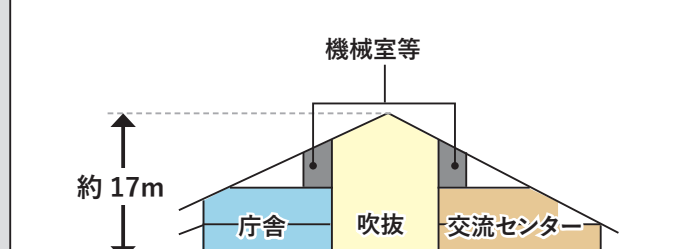
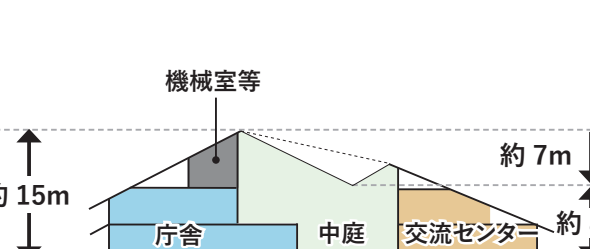
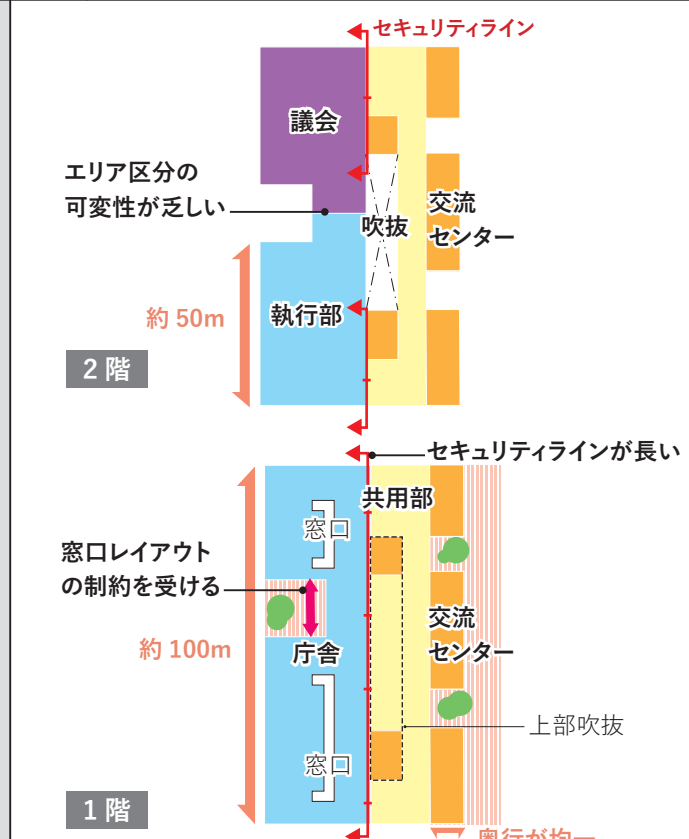
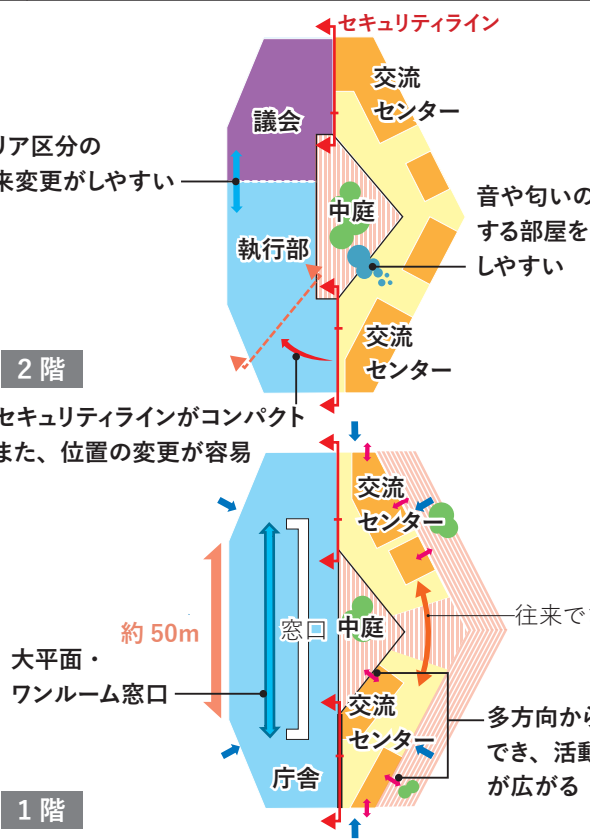
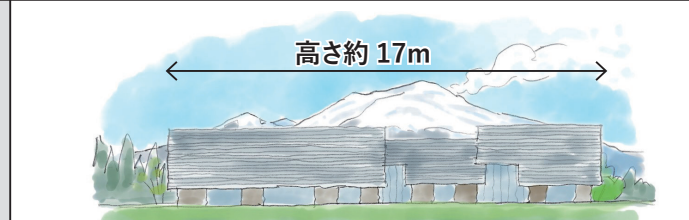
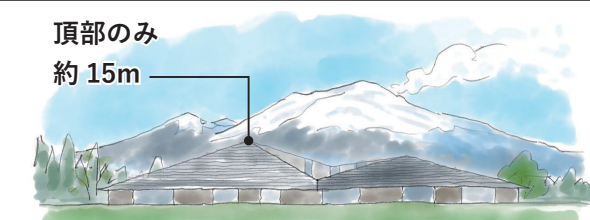
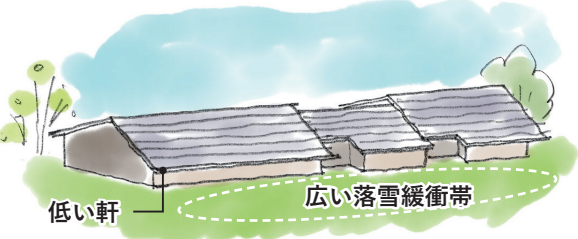
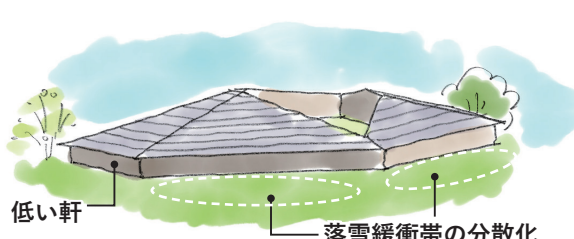
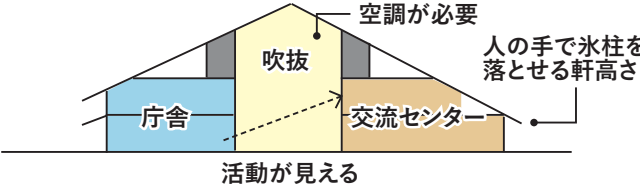
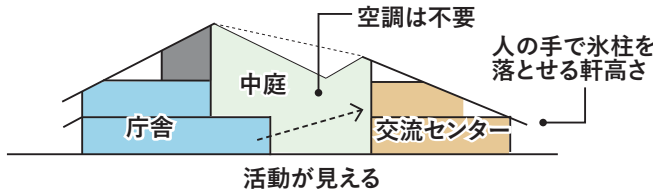
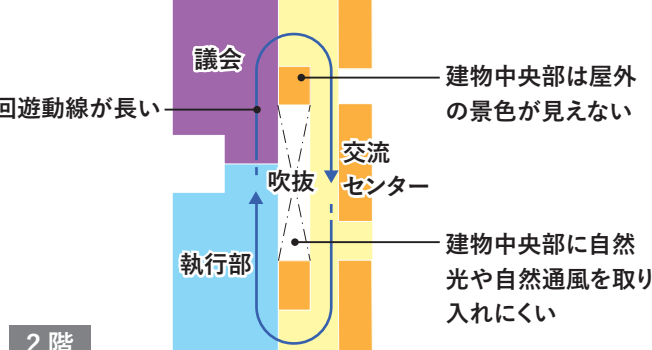
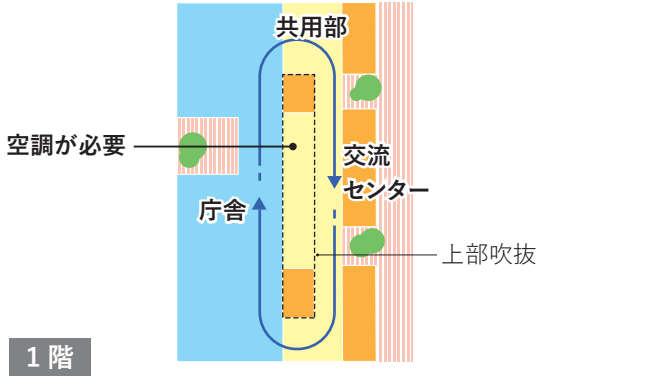
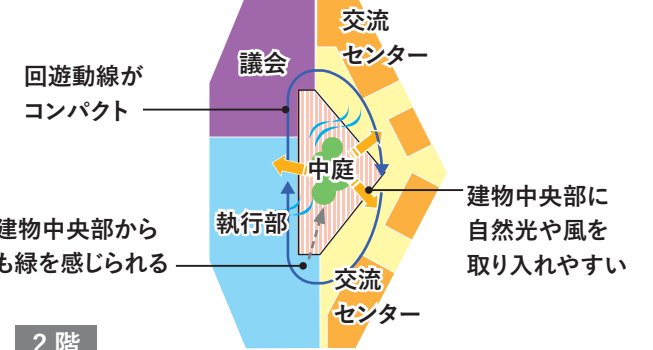
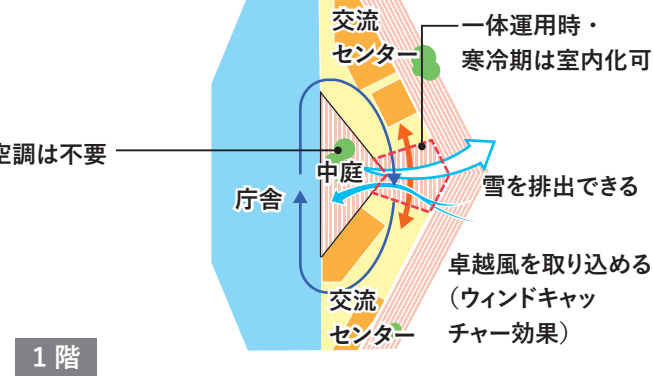


建物形状の特徴比較（建物形状・定量評価の比較）

※現段階での条件を元に検討した内容のため、今後、変更する場合があります

		B 案（基本計画検討初期時点）		中庭案	
建物形状イメージ	ボリュームイメージ	 短手は壁面が 迫り立つ 約 40m 約 20m 約 20m		 約 20m 約 50 m 裏表のない外観	
	断面イメージ	 機械室等 約 17m 庁舎 吹抜 交流センター		 機械室等 約 15m 約 7m 約 8m 庁舎 中庭 交流センター	
	平面イメージ	 セキュリティライン 議会 エリア区分の 可変性が乏しい 吹抜 交流センター 執行部 約 50m 2 階 セキュリティラインが長い 共用部 窓口レイアウト の制約を受ける 約 100m 庁舎 交流センター 上部吹抜 1 階 奥行が均一		 セキュリティライン 議会 エリア区分の 将来変更がしやすい 交流センター 中庭 執行部 2 階 セキュリティラインがコンパクト また、位置の変更が容易 音や匂いの発生 する部屋を計画 しやすい 交流センター 中庭 交流センター 往来できる 約 50m 大平面・ ワンルーム窓口 窓口 多方向から出入り でき、活動の幅 が広がる 庁舎 1 階	
	立面シルエットイメージ	 高さ約 17m		 頂部のみ 約 15m	
	各種面積	延床面積：約 9,000m ² 建築面積：約 5,400m ² 屋根面積：約 6,800m ² 外壁面積：約 2,600m ²		延床面積：約 9,000m ² + 中庭 800m ² 建築面積：約 5,400m ² 屋根面積：約 5,500m ² 外壁面積：約 3,700m ²	
	定量的評価	イニシャルコスト指数 (中庭案を 100 とする) (建設費)	○	95 (80 万 / m ² とするならば 差額約 3.6 億円)	△
	ライフサイクルコスト指数 (中庭案を 100 とする) (※)	○	99	△	100

(※) ライフサイクルコスト：建物を新築してから解体するまでにかかる全費用（建設費、光熱水費・維持管理修繕費、解体費の合計）。光熱水・維持管理修繕費が約 6 割を占める。

			B 案（基本計画検討初期時点）		中庭案		
定性評価の補足イメージ	ボリュームイメージ						
	断面イメージ						
	平面イメージ		 		 		
定性評価	計画の自由度	相乗効果の生まれやすさ		○	・吹抜けを介して1・2階の活動を視認でき、相乗効果が生まれやすい	◎	・中庭を介して1・2階の活動を視認でき、また、中庭の屋外活動との連携も期待できることから、最も相乗効果が期待できる
		良質な室内環境（ウェルビーイング）の作りやすさ	光	△	・奥行の深い平面形となるため、建物中央部に光が届かず暗くなりやすい（改善するには、天窓が必要）	○	・外壁からも中庭からも、まんべんなく光が差し込み内部空間全体が明るい ・中庭があることで採光面が多く、無窓の部屋が少ない
			風	△	・卓越風（東）に対し、屋根面が多いため、特に2階の部屋に風を入れにくい（改善するには、天窓が必要）	○	・卓越風（東）に向け、口を開くように中庭を計画することで、建物全体に風を通すことができる ・中庭があることで、2階の部屋にも風を入れやすい
	緑	△	・景色を感じる部屋が外壁周りに限定される	○	・中庭があることで、多くの部屋で緑を感じることができる		
	省エネ効果	自然エネルギー活用のしやすさ	自然採光	△	・屋根面が大きい点や、奥行きが深い平面形となるため、自然採光の確保が難しい	○	・中庭を計画することで、案の中で最も外壁周長が確保できるため、窓面を多く計画でき、自然採光が十分確保できる
			自然通風	△	・上記と同じ理由から自然通風が活かしづらい	○	・上記と同じ理由からB案初期に比べ自然通風を確保しやすい ・さらに、卓越風に向けた中庭を計画することで、効果的に風を捕まえることができる（ウィンドキャッチャー効果）
	効率的な空調計画のしやすさ		△	・吹抜けが屋内のため、吹抜け部分も空調する必要がある	○	・B案初期の吹抜にあたる部分が中庭（屋外）のため、空調不要	
雪・氷柱対策		雪対策	△	・屋根を分節することで、屋根面1カ所に対し受け持つ積雪量を分散でき、万一の落雪時の安全性をある程度確保できる。ただし、一方向に大量の落雪が考えられるため、軒先直下には広い落雪緩衝帯を設ける必要があるため、計画の自由度の影響を受ける	○	・屋根を分節するとともに、放射状に軒を向けることで、落雪量を抑えるとともに、一方向へ落雪させず、安全性が高い ・中庭を設けることで、屋根面からの落雪量を大幅に抑えることができる ・必要に応じて中庭から雪を排出できるルートを確保	
		氷柱	○	・軒先を人の手が届く位置まで下げることで、氷柱を取り除くことができる	○	・軒先を人の手が届く位置まで下げることで、氷柱を取り除くことができる ・中庭は軒を逆勾配とし、氷柱がでにくい計画	